

# 芦安ファンクラブ通信

2001 夏号

「2001南アルプス開山祭」盛大に開催 芦安ファンクラブ 仲田 公彦

南アルプスは、従来7月1日に開山祭を行っていたが、本年から、キタダケソウの開花期に合わせ6月下旬の土曜日に実施することとした。6月23日「南アルプスの開祖」の関係者にもご出席をいただき、その遺徳を忍び、山に逝った多くの登山者のご冥福を祈るとともに、本年の登山者の安全を祈願する「2001南アルプス開山祭」を実施した。

本年は、21世紀初年度であると同時に、ウエストーンが北岳に登り、広く世界に紹介して100年目、野呂川林道（現南アルプス林道）が開通して40年目に当たります。

南アルプス広河原「アルペン・プラザ」前広場で実施。昨年まで広場前に電柱などがあり正面に聳える北岳の景観を損ねていたが関係者の配慮により、後ろ側へ回したり一部地下埋設などにより大樺沢や北岳を望むレリーフ前で開催した。関係者や登山者など約300人の参加者を数え従来の芦安村等の関係者で行っていた開山祭と趣を変え多彩で賑やかな催しとなった。清水芦安村長の挨拶の後、山梨県知事天野建氏（天野久の息子）、広原信行氏（名取運一の孫）等開祖の縁者や環境省田部和博国立公園課長、地元小笠原警察署長の祝辞をいただき、レリーフに参加者全員が献花、芦安中学校の生徒による「北岳の歌」「雪山賛歌」を献歌、開祖への感謝と遭難者のご冥福、今年の登山の安全を祈った。

真正面には例年にない大雪をいただいた大樺沢とその頂点に北岳が聳え素晴らしい景観の中でクライマックスは勇壮な夜叉陣太鼓の演奏に続き、ウエストーンを案内したガイドのスタイルを復元した人達が、未開の南アルプスの山々を覆う藤や葛の蔓を切り跳ね除ける作業をパフォーマンス化した「蔓はらい」を行い登山者を案内して開山祭が無事終了した。

これらの新しい試みは参加した登山者はもとより、地元の人にも大きな感銘を与え21世紀の南アルプスにかける関係者の心意気を感じた。

この日は併せて「南アルプス黎明展」の開所式も行われた。100年前ウエストーンが撮影した芦安村の風景や登頂時の様子、野呂川林道開設工事の写真や山の道具などを展示し、往時の様子を分かり易く説明している。

また芦安村のご婦人方が現場で打った手打ち蕎麦が参加者に振る舞われお代わりが相次ぐ好評だった。

この開山祭に合わせ芦安ファンクラブが実施した「キタダケソウ観察会」の一行も御池小屋に向かった。しかし翌日の天候が思わしくなく大樺沢二股で引き返したが、記録的な雪渓下りや登山道沿いに咲くミヤマハナシノブやサンカヨウなど高山植物に満足して今年の夏山開きを祝った。

この開山祭には芦安村の皆さんが一致協力して参加していただいたことが大きな成果です。100年前のガイド姿の衣装は村のおばちゃん達が手縫いで作ったと聞きました。

中学生からお年寄りまでが登山者を暖かく迎えた開山祭の反省会で「この祭りで村が自立できた思いがした」という関係者の言葉は出席者の感動を呼びました。



### 新しい地域づくりへの一歩 芦安村役場企画観光課 深澤 知恵美

ウォルター・ウェストン北岳登頂100周年、南アルプス林道完成40周年の節目として、新しい山開きのかたちを企画、開催しました。

当日は、天候にも恵まれ山梨県知事を初め、多数の来賓者を迎え開催することができました。天野知事は、すばらしい緑、清流の大自然の資源を芦安村の財源にして地域の観光振興に寄与し、自然を保護しながら活用し地域振興に連なげてほしいとあいさつ、広原さんは、祖父（名取運一氏）もこのような祭りをひらいていただき、きっと喜んでいるとお礼の挨拶がありました。盛大の中にも、厳かな雰囲気の中新たな21世紀の山開きが無事に行われました。式典の中で、特に新しい目玉として蔓払いの神事は、参加された人々の心に100年前の初登頂から今日の近代登山への足がかりとなり、ウェストンの偉業へ思いを馳せるものとなり深く印象に残りました。

企画の段階から、開山祭のきっかけづくりをしていただいた芦安ファンクラブはもちろんのこと、夜叉神観光協会、芦安村民、行政がそれぞれの立場で知恵を出し合い、自ら動き、汗を流し、新たなイベントの成功を願い、お互いに協力し合う姿の中に芦安村の明日への活力、大いなる自立への道が見えたような気がする。

芦安村の現状は、過疎化、高齢化が進み、地域産業として観光立村を目指し、いろいろな事業を展開しているところであります。また、峡西地域の合併問題についても協議を行っています。村民の英知を結集し開山祭を成功させたように、これからの特色ある村づくりのために芦安村民の更なる英知を結集し、地域を愛する心を持ち住んで良かった村を目指して、21世紀にふさわしい村づくりへの一歩として進んでいきたい。

### 南アルプス開山祭に参加して 深澤 安弘

芦安村では毎年7月に広河原に於いて、山開きと安全祈願祭を行い私も何度か出席させて頂いておりました。今年はウォルター・ウェストン北岳登頂100周年、南アルプス林道完成40周年の節目の山開きのイベントとして、2001南アルプス開山祭が行われ、私も沓沢区長として参加する機会を得ました。

我がふるさと芦安村は、南アルプスの大自然に囲まれその中で森林伐採、炭焼きが主な生活の糧であった、私も父の代より山仕事に関わり夜叉神を初め、広河原を仕事場に自分の庭のように過ごしてきました。しかし時代は流れ、芦安村の中に、山を主にした生活は影をひそめ、里の企業に生活基盤を求めるようになってきました。

開山祭に於いて中沢満さん、小林岩美さんと私で100年前の道先案内人に扮し、「蔓払い」の神事を担う事になり、思いがけず責任の重さに困惑したが、村の重要な行事であるこの開山祭に少しでも役に立てばと思い3人で引き受けました。

当日の私達は、会場の側に用意された別室で100年前の道先案内人の衣装（わらじ・きゃはん・からさん）に着替え出番を待っていました。いよいよ私達の出番（蔓払いの神事）です。即興で山の神々に対してのお祈りの言葉を申し述べた。「お池に勧請し、たてまつるオウヤマズミノ尊、大天狗、子天狗様、大きな力を持つ神々に開山100年の今日私達案内人3名が信者に変わってお願いに参りました。登山者の安全と、芦安村の繁栄と、山梨県の繁栄をお願いして開山100年の今日、南アルプス全山を開山する」、「エイ、エイ、ヤー」の掛け声と共に目の前の藤蔓に斧を振り下ろした。「これで良かったのか？」一抹の不安はあったが周囲の人々の歓声を耳にして、少し肩の荷が下りたような気がしました。

昔のことを思い出しました。山の伐採、炭焼き仕事を主にしていた父ですが、ある年のお盆の13日から1週間の予定で白根三山に登り、早川町西山までの案内を頼まれ、お盆のこと、父も断ったが、世話人が帰ってくれず、しぶしぶ案内人を引き受けることにした。山に働く人は、お盆とお正月休みを楽しみで働いているのにと子供心に思ったことを思い出し、今自分がその案内人となり行事を成し遂げた時の充実感もありました。

このような新しい開山祭を企画された村当局、関係団体に深く感謝申し上げますと共に、この開山祭が今年だけの祭りではなく来年以降盛大に継続されることを心よりお祈り申し上げます。



**芦安村の将来展望** 芦安ファンクラブ会長 山梨大学工学部教授 花岡 利幸

樺平から仰ぎ見る鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳、白根三山のパノラマは絶景の一語に尽きる。特に冬の眺望は普通の人には行けない高山の迫力ある雪世界を眼前に見せてくれる、わが国第一級の展望地点だと思ふ。

この展望地点を広い視点から確認する上で、どうしてもやっておかなければいけない課題が白根三山縦走で、向こうからこちらを見ることであった。8月8日快晴、間の岳からのパノラマ展望は仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、北岳、その右肩奥に八ヶ岳、手前に鳳凰三山（地蔵、観音、薬師）そして夜叉神峠、高谷山、樺平、櫛形山が遙か低位置に見える。その向こうに甲府盆地も霞んで見える。だんだんと眼を転じて一ぐるりして近景に戻る。農鳥岳の東斜面の這松の緑光が朝日に映えて飛び込んでくる。その右奥に植生限界を超えた赤茶けた尾根筋をむき出した塩見岳が見える。興味を惹く山だ。

芦安村は夜叉神峠、高谷山、樺平を境にして、その奥のこれらの山々（その総称が南アルプス）と、その手前の山裾の集落部（甲府盆地の西端）とから成り立っている。

わが国にはスイスのツェルマットやグリュネバルトのような山岳観光都市がない。この集落部を南アルプスの山岳観光都市にしたい。この集落部の山岳観光都市へ大都会からの観光客の来訪。ここを基地にして南アルプス奥深くへ入っていく登山、ハイキング、周辺の前衛山を散策するハイキング、ピクニックそして基地にある温泉での滞在、登山教室、自然観察、絵画、読書、保養などの山岳観光都市活動への参加。

東京圏に近接する芦安村は近い将来、東京から1時間圏内に位置することになるだろう。自然を守ることを第一としてその自然にマッチしたまちづくりをすること、美しい村をつくるのが大切であ

る。それを実現するには、しっかりしたマスタープラン(全体計画)を作り、“ゆっくり、あわてろ(フェスティナレンテ：ラテン語)”で全体計画に則り一つずつ個別計画を実行していくことが大切である。

#### **間伐材の積極的な利用** 芦安ファンクラブ 今澤 伸次

アルペンプラザ広河原の前にあるガードレールは木材(間伐材)で作られています。金属製のものと比べると、温かさや親しみが感じられ、訪れる人により印象を与えます。

最近、こうした土木・建築構造物に間伐材が使われるようになってきました。公園のベンチや階段などの身近のものから、河川の護岸や砂防ダム、道路の遮音壁などです。

従来、構造物の材料には耐久性や強度からコンクリートや金属が使われていましたが、ここ数年、間伐材も材料として使われています。その理由には、次のようなことがあります。さて、地球温暖化抑制の効果をあげるには、限られた森林面積でCO<sub>2</sub>を固定するだけでは限界があります。

##### 景観材としての間伐材

外気温の影響をあまり受けず、寒暖差が感じられない木材は、人が直接触れるようなベンチや遊歩道、デッキなどに適しています。硬いイメージになりがちな構造物も、ほかの素材にはない木材ならではの独特な温もりによってやわらかなイメージになります。こうしたメリットから、絶対的な強度や耐久性が必要な場所を除いて、多少コストがかかっても木材が使われるようになってきました。

##### 環境材としての間伐材

金属やコンクリートと比較して、木材はCO<sub>2</sub>(二酸化炭素)をストックするという長所があります。CO<sub>2</sub>は温室効果ガスとも呼ばれ、世界的な問題になっている地球温暖化を促進する物質の一つです。木材は、その長所から地球温暖化を抑制する優れた材料といえます。

そこで、木材がCO<sub>2</sub>を固定したら収穫して構造物として社会の中にストックし、植林によって若い木を育て大気中のCO<sub>2</sub>の吸着を更に促進することが重要です。つまり「植林 育成 収穫 植林」という森林のサイクルをまわすことです。

そのためには、間伐などの森林の手入れが必要であり、間伐材を積極的に社会で使うことが重要です。このような背景から、土木・建築構造物に間伐材が使われるようになってきました。景観や環境の視点から、積極的に間伐材を使うことが重要ですが、できれば地場産を使うことが望ましいと思います。わざわざ遠くから運んで使うことは、運搬コストもさることながら、それだけ多くの化石燃料を使うことになり、結果として地球環境に負荷を与えてしまいます。

最初にご紹介しましたガードレールに使われている材料は、長野県から運ばれてきたものだそうです。芦安で使う材料を芦安で調達するような仕組みができれば、地球環境と共に村の経済にもプラスになります。

芦安の森林資源は豊富です。環境保全や経済活動の面から森林資源の有効活用をあらためて考えてはどうでしょうか。

#### **御池小屋の動向** 芦安村役場 企画観光課 課長 深澤 秀

広河原より尾根ルートを3時間かけて登ると御池小屋に到着する。この登山道は古くから使用されているものであるが、近年の登山者は大樺沢ルートを利用し、御池小屋へはトラバースして入ってくる登山者が増えてきている。急な尾根ルートよりなだらかな大樺沢ルートの方が人気があるのが近年の傾向である。

県においては、平成11年より二俣に仮設トイレを設置し、登山者の利用と環境保全に対応している。このような現状のなかで二俣周辺への御池小屋の移転問題が浮上してきた。

国立公園計画においては、大樺沢ルートは正式に認められていないのが現状である。このため御池小屋の移転については、まず国立公園計画の見直しが必要である。その後に事業計画の決定があり、建設の許可が出されることとなる。この流れと同時に進行するのが保安林の解除についてである。この2つの許可の後、恩賜県有財産の所有者である県の土地使用許可が必要になる。この3者の許可がそろって初めて事業の本稼働である。

いずれにしても本村だけではどうにもならない状況であるが、今後も関係各方面のご協力をお願いいたします。

## 北岳登山の思い出 芦安中学校 高木 陽介

7月15日、その日はぼくが楽しみにしていた登山の日でした。生まれて初めてする登山なので不安でした。当日の朝、ドキドキしながら学校へ向かいます。学校につき、みんな集まり出発式を始めます。司会だったぼくは、会を進めながらも声は少しふるえていました。会が終わり、みんな車に乗り込みます。車よいがひどいぼくは、広河原につき、そこにあったベンチの上でバテていました。20分ほど休けいし出発します。ゆっくり休み、元気になり、出発の時間が来ました。気合入れにおもいきりザックを背負い、一列になって山に入っていきます。入ってすぐ周りを見回しますがあたりまえのように、高山植物らしき物は見当りません。登って行く途中に4、5回は休けいがありました。でも、ぼくはそんなにつかれませんでした。しかし、何度も休けいするには、もう一つ意味があるのです。それは「高山病を防ぐためなのです」と、前に学習しました。しばらく登って行くと、御池小屋近くにあった川で水をくみました。その水はなんとっていいのかわからなかったけど、とてもうまかったです。

御池小屋につき、昼食をとって出発します。出発してすぐ山を見ると、草すべりという大きな坂が見えます。そこを登っている小さく見える人を見てドキッとしました。登って行くうちに少しずつ坂がきつくなっていきます。ずっと登って行くうちに草すべりは過ぎていました。そして、だんだん肩の小屋が見えて来ました。そこまでの道は、山の斜面に一本道がある感じで、もう下なんて見れないくらい深いです。もう谷間が見えるくらい。

肩の小屋につき、休けいになりました。するとちょうどよいところで夕日が見れました。その日はもうなにもいえないくらいきれいで、そこでずっと座って見ていたい気分でした。そこに座っていると、何も考えないでただその夕日を見ていればいいと思いました。ここまで登ってきたけど、このために登って来たような気がします。部屋にもどり、かばんの中を整理し夕食を食べ、そして今日の1日は終わりました。次の日は早く起き、雨具を着て外に出て北岳の頂上をめざしました。頂上につき周りを見ると、もう声もなにも出ないくらい美しい雲海が見えたのです。その景色は今でも覚えています。そして下山をして北岳登山は終わりました。この登山で何でも挑戦する大切さを学びました。本当に楽しかったです。

